

機関番号：11301

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 ~ 2010

課題番号：19520384

研究課題名 (和文) 方言形成における中央語再生現象の研究

研究課題名 (英文) Reformation of Historical Words in Dialect Formation

研究代表者 小林 隆 (KOBAYASHI Takashi)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00161993

研究成果の概要 (和文)：

日本語の方言形成にあたって中心的な役割を果たしたと考えられる「中央語の再生」現象について検討し、その特徴を明らかにするとともに、方言形成の一般原理としての理論的整備を行った。日本語の方言形成は、中央語の単純な伝播によって起こるのではなく、中央語を受容し、再生する地域独自の作用が大きい。特に、言語の運用面など、社会的背景が方言形成に関わる場合には、地域の社会構造の違いによって、東西差などの顕著な地域差が生じることになる。

研究成果の概要 (英文)：

“Reformation of Historical Words” phenomenon thought to have played a center role when a Japanese dialect was formed was examined. The feature of this phenomenon was clarified, and theoretical maintenance as a general principle of the dialect formation was done. When a Japanese dialect is formed, the regional action of receiving a central word, and reproducing it greatly influences. Especially, when do relations of the social background like the operation side of the language to the dialect formation, a remarkable regional variation of the east and west difference etc. will be caused by the difference of the social structure in the region.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
20 年度	900,000	270,000	1,170,000
21 年度	500,000	150,000	650,000
22 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言形成、日本語方言、日本語史、感動詞、方言地理学、比較方言学

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内・国外の研究動向との関連

方言学の関心が社会言語学的な現象の解明に移ったことにより、日本語の方言形成については、十分な研究の進展が見られていない。しかし、近年、海外の「成層論モデル

(Stratification model)」などの理論の出現や、「地理情報システム」などコンピュータを使った処理技術の開発など、理論・方法面での蓄積がなされつつある。また、(2)で述べる危機言語記録の一環としての方言資料の収集や、国立国語研究所の『方言文法全

国地図』全6巻の完結(2006年)によって、資料面でも方言形成について考える基盤が整いつつある。さらに、馬瀬良雄監修・小林隆他編『方言地理学の課題』(2002年)、日本方言研究会編『21世紀の方言学』(2002年)の2つの研究書、および、日本語学会のシンポジウム「リンクする方言研究」(2005年春季大会)などによってこの分野の研究課題が整理されたことにより、学界の関心は高まりつつある。

(2) 応募者のこれまでの研究との関連

応募者は、日本語方言の形成について『方言学的日本語史の方法』(2004年)をまとめ、その中で、今後の研究課題として、方言形成のモデル化の試みを指摘した。同時に、全国の研究者を組織し、科学研究費基盤研究(B)「日本語方言形成モデルの構築に関する研究」(2003~2006年度)を通して、その具体的な作業を展開した。その成果は、『方言の形成(シリーズ方言学1)』(岩波書店)として公表してある。この研究プロジェクトでは、日本語方言の形成に関わる諸現象を、事例研究から一般化のレベルに引き上げることを目標とし、一定の成果を得た。ただし、応募者自身の課題である“総合的なモデル”の構築は概略にとどまった部分があり、より精密化を図る必要がある。そこで、今回応募した研究では、特に、「中央語の再生」という現象について綿密に検討することとした。なお、応募者は、上記の科学研究費、および、特定領域研究(A)「消滅する方言語彙の緊急調査研究」(2000~2002年度)によって、主として語彙の分野で約300項目に及ぶ全国分布データを得ており、研究遂行に必要な資料的基盤も整備しつつある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、次のとおりである。

《日本語の方言形成にあたって中心的な役割を果たしたと考えられる「中央語の再生」現象について検討し、この現象の特徴を明らかにするとともに、方言形成の一般原理としての理論的整備を行うこと。》

ここで言う「中央語の再生」とは、歴史的中央語が各地に伝播し、地域的変容を受けながらも、新しい形式として広範囲の方言に広まり定着する現象を指す。方言の形成には、基層語の影響を除けば、中央語に対する地方語の対応のしかたの違いが大きく関わっている。再生は変容の一種であるが、古典語の「べし」が東日本の「べー」となって広い地域を覆うように、中央語が単に変容するだけでなく、それが言語的活力を得て広範囲に定着し

ていく現象を指す。再生(変容)は、拒否・保存・消滅の各パターンに比べて、日本語の方言形成にとって特に重要な現象であると考えて、ここに取り上げるものである。

日本語の方言形成における「中央語の再生」をテーマとして、研究期間内に具体的に目標としたことは次の3点である。

- (1) 中央語の再生現象における諸特徴の把握 (=第1段階の目標)
- (2) 方言形成の一般原理としての理論的整備 (=第2段階の目標)
- (3) 方法論の開拓、および研究資料の作成 (=目標達成のための基礎固め)

まず、(1)は具体的な方言データを分析し、その特徴を詳細に把握するもので、第1段階の目標として設定した。次に、(2)は(1)の結果に基づき、方言形成論としての一般化を試みるもので、第2段階の目標、すなわち、本研究における最終目標である。(3)の目標は、最後に置いたものの、その位置づけは(1)(2)の目標を達成するための基礎的な作業である。ただし、方法論の工夫、および新資料の作成は、それ自体が本研究のひとつの重要な成果として期待できる。以下、順に説明する。

(1) 中央語の再生現象における諸特徴の把握

具体的な方言データに基づき、中央語の再生現象に見られる特徴を把握する。分析の観点として、大きく a. 再生の内容、b. 再生の要因、c. 再生の地理的・時間的性質次の3つを用意する。

(2) 方言形成の一般原理としての理論的整備

上記(1)で明らかになった内容に基づき、方言形成論としての再生現象の一般化を試みる。その際、従来唱えられてきた「方言圏論」「方言孤立変遷論」「多元的発生」など原理や、安部清哉氏の「四つの層」の仮説、さらに、海外の「成層論モデル」などの諸説との関連を検討し、方言形成モデルのひとつとして「中央語再生モデル」を提出する。

(3) 方法論の開拓、および研究資料の作成

方法論的には、分布論的検討(方言地理学)や内的再構(比較方言学)、文献学的方法のほか、主要地点における記述調査も交え、総合的に現象を把握する方法を提案する。また、分析には既存の方言資料を利用するほか、「文献・方言対応基礎データ」や『『日本語地図』『方言文法全国地図』補足資料』および、各地の記述調査資料などを新たに作成し使用する。

3. 研究の方法

本研究の計画を「量的研究」と「事例研究」とに大きく分け、それぞれ、「調査実施・資料作成」と「分析」を経ながら、最終的に両

者を「総合」し、中央語の再生についての「一般化」を行った。以下、具体的に述べる。

(1) 量的研究：中央語の再生を概略的に把握する作業

中央語の再生における諸特徴を概略的に把握するために、量的研究を行う。具体的には、次の2つの作業を行った。

①「文献・方言対応基礎データ」の作成（資料作成）：中央語と方言との対応関係について見通しを得るために、小学館『日本方言大辞典』の項目の中から、中央語と対応関係のある1000項目を選んで分析した。この1000項目分の『日本方言大辞典』のデータはすでに入力作業を終えているが、このデータを、「形態」「意味」「品詞」「語種」「分布地域」などの観点から分類・加工するとともに、『日本国語大辞典』のデータにより語形の「初出時期」などの時代情報を付加し、「文献・方言対応基礎データ」として整備した。

②「『日本言語地図』『方言文法全国地図』補足資料」の作成（調査実施・資料作成）：中央語と方言との対応関係の概略をつかむために、国立国語研究所『日本言語地図』と『方言文法全国地図』を基礎的な資料として使用する。ただし、それらの資料が対象としていない感動詞と言語行動の分野については、新たな調査を行う。この調査は、100項目程度を対象に、全国2000地点への通信調査によって行い、結果を「『日本言語地図』『方言文法全国地図』補足資料」として整備した。通信調査は、応募者がこれまで実施してきた全国の教育委員会の協力を得る方法での郵便通信法によって行い、回収率は約50パーセントであった。

③特に、感動詞の分野については、国立国語研究所図書館等の資料調査によって、方言の記述を収集し、「感動詞方言資料集」として整備した。

(2) 事例研究：中央語の再生を個別的に把握する作業

上記の量的研究では、中央語の再生を概略的に把握することが可能であるものの、そのメカニズムの詳細に迫ることはできない。そこで、事例研究によってこの点を補足した。

①全国分布の分析：特定領域研究(A)「消滅する方言語彙の緊急調査研究」（2000～2002年度）によって収集した資料、および、今回の調査項目の中から、感動詞とオノマトペを対象に全国分布地図を作製し、文献資料とも対比しながら解釈を行った。

②主要地点記述調査の実施：地方における再生の内容や要因を詳しく把握するため

に、全国の中から調査地点を選び、記述調査を実施した。特に、感動詞の分野について、東北三陸地方や琉球宮古・八重山地方等で調査を行った。

最終的に、以上の(1)量的研究と(2)事例研究とを総合し、結論を導いた。

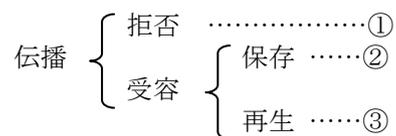
4. 研究成果

(1) 方言形成における「再生」の位置づけと課題についての知見

日本語方言における伝播は、非常に単純な図式で理解されてきた面がある。これは、伝播論の象徴的な存在である方言周圏論がまさにそうであり、この理論は中央語の伝播を地方が順次受け止めるというまことにシンプルな解釈の上に成り立っている。そこでは、中央語と地方語とが接触することによって生ずるさまざまな局面が見落とされている。

中央からの伝播に対して地方の取り得る選択肢は「受容」だけではない。まず、「拒否」という選択がある。中央語を、ある地域では受容し、別の地域では拒否したとすれば、そこに方言差が生じる。また、一旦受容したとしても、中央語をそのまま保存するのではなく、それを再生し新たなことばに作り変えるということもありうる。この「保存」と「再生」という対応の違いも、方言に多様性をもたらす一つの要因となる。

以上をまとめれば次のようになる。中央からの言葉の伝播に対する地方の受け止め方としては、それを「受容」するか「拒否」するかといった選択肢があり、受容の場合、さらにそれを「保存」するか「再生」するかといった選択肢がありうるということになる。



方言周圏論は、このうち、伝播→受容→保存という②のパターンを想定したものである。これは、地方は中央語の伝播をそのまま受け入れるはずだ、という理解の上に成り立っている。しかし、現実には、伝播の拒否(①)や、受容の上での再生(③)といった現象が起こりうる。これは各地の方言が必ずしも中央語に対して従順ではなく、それとの接触の際に、独自の動きを見せることを意味する。そして、従来の方言形成論では、この、地方における独自の作用に対する目配りが弱かった。いわば、“送り手の論理”が優先されてきたのであり、“受け手の論理”は後回しになっていた。方言形成論の今後の課題として、“受け手の論理”の具体的な姿について検討しなければならない。

(2) 「再生」と社会的背景の関係についての

知見

感動詞やオノマトペ・言語行動など、言葉の運用的な側面について具体的現象を分析した結果、言語化、定型化、分析化、加工化、客観化、配慮化、演出化という7つの発想法を抽出することができた。これらの言語的発想法は、地理的に見た場合、「近畿を中心とした西日本、および関東」で発現しやすく、「東西の周辺部、特に東北を中心とした東日本」では現れにくいことが明らかになった。

さらに、「社会と言語運用の関係モデル」を提示することで、言語的発想法を生み出す「言語環境」と「言語態度」を探り、さらにその背景にある「社会構造」の特徴についても考察した。すなわち、「社会構造」のあり方として、人的接触が活発であるとともに階層の流動性が高く、また、民主的な決定システムを備えていて話し合いが重視される社会は、「言語環境」の面でコミュニケーションの活性度が高く、かつ、「言語態度」の点で言語への依存性が強いという性質を発現させる。そして、それらの性質に呼応して、7つの言語的発想法が積極的に生み出されていく、と考えた。

これらの社会的背景は中央からの言語の伝播に対して、地域的に異なった反応を引き起こすことを示唆し、そこで行われる再生にも、方向性と積極性の違いをもたらすと考えられる。すなわち、方言形成の実態は、次のような地域ごとの自律的な動きと、中央からの伝播との両方が相俟って成立すると考えるのが妥当である。

- a. 自律変化論的形成＝地域の社会構造に応じた形成
- b. 伝播論的形成＝中央からの伝播による形成

(3) オノマトペと感動詞の事例研究に基づく知見

①「大声で泣く様子」を表すオノマトペ：「大声で泣く様子」を表すオノマトペの分布は、主に中央語の伝播を受容するかたちで形成されたと考えられ、その順序は、オ-系>オ-系・ワ-系>オ-系・ワ-系・エ-系・ギャ-系、であったと推定される。一方、文献に見られた-i型>-i型・-R型>-i型・-R型・-N型という発達は、ワ-系の方言分布には反映されているが、オ-系には当てはまらない。オ-系は-i型としたものが、もともと鼻音を伴っていた可能性があり、それが後に各地で再生されることにより、複数の形式を派生させたと考えられる。さらに、「大声で泣く様子」をオノマトペで表現するのは東日本、特に東北地方であり、西日本では、副詞句や形容詞、動詞によって表現する傾向が見られる。この傾向は、現場性の強い直接的な表現が好まれる東日本と、現場性の弱い間接的な表現が好まれる西日本といった表現の志向性の

違いが現れたものであり、日本語の発想法の歴史を反映している可能性がある。

②「猫の呼び声」の感動詞：指示系感動詞の一種である猫の呼び声について、地理的な視点から取り上げた。猫の呼び声には、全国的に見て舌打ち類、鳴き声類、名前類、命令類の4種類がある。それらの複雑な分布は、表現の自由度と命名の必然性からくる呼び声独特の性質に由来するものであり、中央からの伝播と再生・各地の多元的発生が絡み合うことで形成されたものと考えられる。また、命令類の使用に注目すると、犬・猫・鶏という動物の待遇に関わる言語的発想法の地域差が見えてくる。動物を呼ぶ際に人間並みの配慮を示す近畿方言と、動物はあくまでも動物として待遇する日本の周辺地域、とりわけ東北方言との違いが浮かび上がる。さらに、舌打ち類の成立過程について見ると、もともと猫を呼ぶ際には舌打ち音が使用されていたが、それをもとに言語化が行われたり派生形式が作られたりすることで、各地で多様な形式が再生されていったと推定される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

1. 小林隆、「日本語方言の形成過程と方言接触—東日本方言における“受け手の論理”—」、『日本語学』、査読無、29-14 巻、2010年、32-44 頁
2. 小林隆、「オノマトペの地域差と歴史—「大声で泣く様子」について—」、『方言の発見—知られざる地域差を知る—』、査読無、2010年、21-47 頁
3. 小林隆、「日本における方言調査・記録の現状—「消えゆく日本語方言の記録調査」の取り組み—」、『新国語生活』、査読有、20-3 巻、2010年、48-60 頁
4. 小林隆・澤村美幸、「言語的発想法の地域差と歴史」、『国語学研究』、査読有、49号、2010年、1-14 頁
5. 小林隆・澤村美幸、「言語的発想法の地域差と社会的背景」、『東北大学文学研究科研究年報』、査読無、59号、2010年、127-162 頁
6. 小林隆、「談話表現の歴史」、『日本語表現学を学ぶ人のために』、査読無、2009年、188-211 頁
7. 小林隆、「東北南部地域における方言の概要」、『日本語方言地域概要報告』、査読無、2009年、21-37 頁
8. 小林隆、「文法的発想の地域差と日本語史」、『日本語学』、査読無、26-11 巻、2007年、76-83 頁

〔学会発表〕(計5件)

1. 小林隆、「東西・言葉の発想法」、國學院大学国語研究会平成22年度後期大会、2010年11月27日 國學院大学
2. 小林隆、「言語的発想法の歴史と方言の形成」、日本語学会、2010年5月29日 日本女子大学
3. 小林隆・澤村美幸、「消えゆく日本語方言の記録調査—『日本言語地図』との関連で—」、大規模方言データの多角的分析研究会、2010年3月15日 国立国語研究所
4. 小林隆・澤村美幸、「日本の文化領域と言語的発想法の方言形成」、言語・文化の領域形成に関する研究会、2010年2月22日 メルパルク京都
5. 小林隆・澤村美幸、「方言分布と文化的背景—「焼畑」の名称を例に—」、日本語学会、2009年5月31日 武庫川女子大学

〔図書〕(計4件)

1. 小林隆・澤村美幸、私家版、『言語的発想法の地域差とその形成についての研究』、2011年、98頁(全体を共同執筆)
2. 小林隆・篠崎晃一編、ひつじ書房、『方言の発見—知られざる地域差を知る—』、2010年、207頁(全体を編集)
3. 小林隆編、岩波書店、『シリーズ方言学1方言の形成』、2008年、222頁(全体を編集)
4. 小林隆・篠崎晃一編、ひつじ書房、『ガイドブック方言調査』、2007年、212頁(全体を編集)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/hougen/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 隆 (KOBAYASHI Takashi)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00161993